

写真部の指導方法について AI に聞いてみました

「写真部の指導って、何をすればいいんだろう？」とお悩みの顧問の先生方に代わって、生成系 AI に聞いてみました！

写真の媒体が銀塩からデジタルへと移行し、さらにスマートフォンやSNSの普及によって、誰もが手軽に写真を撮り、多くの人に見てもらえる時代になりました。その一方で、「あえて写真部に所属して活動する意義」が見えにくくなっている面もあるかもしれません。こうした状況の中で、どのような工夫をすれば写真部の活動を活性化し、生徒の技術向上につなげられるのか、悩んでおられる顧問の先生方も少なくないのではないかでしょうか。

そこで今回は、実際に ChatGPT(GPT-5)を行ったやり取りの内容をご紹介しながら、写真部の指導方法について考えてみたいと思います。

Q1 「何を撮ればいいのか？」を指導する方法を教えてください。

A 高校の写真部で「何を撮ればいいのか（＝被写体の選び方・テーマ設定）」を指導するのは、撮影技術以上に創造性を育てる重要な部分です。しかし、顧問の先生に写真経験が少なくて、十分に良い指導ができます。以下のような「問い合わせ型」「共有型」「仕組みづくり型」の方法を組み合わせるのがおすすめです。

1. 「何を撮るか」を育てる3つの視点

①「自分との関係」から探す

被写体は「自分が気になるもの」から出発すると良いことを生徒に伝えます。例えば、毎日見るけれど気にしていなかったもの、自分の部屋・通学路・学校の裏側、家族や友人、自分にとって大切な人や時間、などです。

たとえば、「最近、気になった光景や出来事は？」と短い日記をつけさせてみて、その中から「写真に撮ってみたいもの」を選ばせます。顧問は「なぜそれが気になるの？」と聞き返すだけで十分です。自分の関心の理由を言葉にすることが、テーマ意識を育てます。

②「視点の違い」から探す

写真部員が同じ被写体を撮っても、見え方は人によって違います。その違いを意識させると、「何を撮るか」＝「どう見ているか」に気づきます。

たとえば、同じ場所・同じ時間に全員で撮影した後、撮った写真を見せ合って「自分は何を写そうと思ったか」を発表させるのです。顧問は「なるほど、同じ場所でもこんな見方があるんだね」と促すだけでOKです。比較する中で、「自分の関心」「他人の視点」を可視化できます。

③「テーマ」でまとめる練習をする

「1枚の写真」ではなく、「シリーズ」で考える力を養うと、撮影対象が広がります。

テーマを一人ひとつ決めて（例：「朝」「静けさ」「部活動」「通学路」「校舎の影」など）、複数枚（3～5枚）の写真でまとめる、という課題を出してみましょう。その際、顧問は「言葉のテーマ」だけ提示して、撮り方は自由にさせます。生徒同士で意図を話し合う時間を設ければ、顧問に専門知識がなくても深い学びになります。

2. 顧問ができる「問い合わせ中心の関わり方」

顧問が専門家でなくても、良い質問者になることが大切です。以下は質問の例です。

- ・気づきを促す「どうしてそれを撮ろうと思ったの？」
- ・表現意図を引き出す「この写真で何を伝えたいと思った？」
- ・見方を広げる「別の時間帯に撮るとどうなるかな？」
- ・比較・成長を促す「前の作品と比べて、どこが変わった？」

3. 部活動としての仕組みづくりの具体例

①「テーマ撮影日」を設ける

毎月1回、「○○を撮る日」を設定します（例：「光」「影」「時間」「形」など）。顧問はテーマを出すだけで、生徒が自由に撮影するようにします。

② 部内講評会を行う

月に1回、1人3枚程度を選び、スライド投影または印刷して鑑賞会を行います。「撮った生徒のコメント → 他の生徒のコメント → 顧問の質問」の順で進めるのが理想的です。

③ 校内展示を行う

校内展示を企画し、テーマ性のある発表を目指します。「1枚の名作」よりも「自分らしいシリーズ」を重視させます。

Q2 初心者が撮った写真の中には「何かが写っているだけ」というものも見られます。この状態から「作品」に持っていくためには、どのような指導が有効でしょう？

A 写真部の初期段階で最も多く見られる課題が、まさにその「何かは写っているけれど、何を伝えたのか分からぬ写真」です。この状態から「作品」へと進むには、「意図を持って撮る」感覚を育てる指導が効果的です。顧問に専門的な撮影スキルがなくても、問い合わせと仕組みづくりで十分に導けます。

初心者の写真が「ただ写っているだけ」になる理由は大きく3つあります。

- ① 「何を撮りたいか？」が自分でもはっきりしていない
- ② 見せたい部分が構図の中で埋もれている
- ③ 撮った後に振り返りをしていない

これらを踏まえて、次のような3段階の指導を行うのが効果的です。



第1段階：「なぜ撮ったの？」と問う

最初にすべきことは「技術指導」ではなく「言葉にする練習」です。

(指導例) 顧問が講評のときに、以下のように尋ねる。「この写真を撮ったとき、どんな気持ちだった?」「どこを一番見せたかった?」「撮る前に何を思ってカメラを向けた?」

顧問は「答えのある評価」を出す必要はなく、撮影者の意図を引き出して言葉にさせることが目的です。このような質問を通して、生徒は「ただシャッターを押す」状態から「意識して撮る」段階へと移行します。

もし、生徒が言葉にできなければ、意図がまだぼんやりしている証拠です。「つまり○○が印象的だったんだね」というように、一緒に言語化を支援してみましょう。

第2段階：「何を見せたいか」を絞る練習

次に、「自分が伝えたいを中心構成する」練習をします。これは構図の練習でもありますが、狙いは「選ぶ」ことになります。

(指導例) 同じ被写体に対して狙いの異なる課題を複数設定して、それぞれに沿った振り分けをさせる。そして、撮れた写真を比較する。例えば被写体を「教室の机」として、次の3つの課題を設定する。

- 課題A：「机そのものの形を見せたい」 課題B：「机に差し込む光を見せたい」
課題C：「机で勉強している人の雰囲気を見せたい」

その際、撮る前に「どんな写真にしたいか」を短くメモさせると効果的です。目的を先に決めてから撮ることで、構図・明暗・距離が自ずと変わります。

こうすることで、「なんとなく撮る」から「選んで撮る」に意識が移ります。

第3段階：「並べて見て気づく」時間を設ける

撮影後の振り返りをしないと、成長の方向が見えません。顧問は「並べて見る」ことを促すだけで十分です。

(指導例) 同じテーマ(例：「放課後」)で複数枚撮らせる。そして、撮った写真の中から1人3枚ずつ選び、机上やスライドで並べ、「自分が伝えたいことが出ているのはどれ?」を考えさせる。

ここで初めて「作品」という意識が芽生えます。「見せたいことがある写真」が作品であり、それを他人に説明できる「表現者」になったということです。

声かけの例：
・何を撮ったらいいかわからない → 「最近、気になったもの・心が動いた場面って何?」
・なんとなく撮った写真 → 「これを撮ったとき、どこを見ていた?」
・伝わらない写真 → 「見せたい部分を、もっと強調するにはどうすればいいと思う?」
・まとまらない → 「この中で一番“自分らしい”と思う写真はどれ?」

まとめると、

- 第1段階：「なぜ撮るのか」を問う（意図の言語化）
- 第2段階：「何を見せたいか」を選ばせる（構図・視点の意識化）
- 第3段階：「撮ったあとに振り返る」（鑑賞・共有による自覚化）

このように段階的に進めていけば、顧問が専門知識を持たなくても、「問い合わせ」と「振り返りの場」をつくるだけで、生徒は確実に“作品”に近づいていきます。

Q3 写真に詳しくない顧問教員が、「写真を見る力」「生徒の写真を評価する力」を身につけるのに良い方法はありますか？

A 写真部では、顧問が写真経験に乏しいことが実際によくあります。しかし、「写真を見る力」＝写真をどう感じ、どう読み取るかは、必ずしも専門的な技術知識に依存しません。むしろ、教育的視点をもつ教員だからこそ伸ばしやすい部分もあります。以下、「初心者顧問が写真を見る力・評価力を育てる」ための実践的ステップを紹介します。

1. 「写真を見る力」を養う段階的ステップ

①「良い／悪い」ではなく、「どう感じたか」「なぜそう見えるか」を言語化する

まずは感覚と言葉を結びつける練習をします。専門的な技術用語ではなく、形・明るさ・視線・感情 といった一般的な言葉で十分です。

例：「この写真は静かだと感じる。なぜ？」→「色が少なく、構図も中央に余白が多いから」

「この写真は動きを感じる。なぜ？」→「被写体がブレている・斜めに撮られているから」

②「写真史の名作」を教材に、“名作が名作とされる理由”を学ぶ

これは「基準を体で覚える」方法です。名作といわれる写真作品の画像を見ながら、以下のような点を整理します。

- ・何を撮っているか（テーマ）
- ・どう撮っているか（構図・光・瞬間）
- ・なぜそれが時代を超えて残っているか（社会性・個性）

③「生徒の写真を評価する」ではなく「読み取る」から始める

最初から「上手／下手」「構図が悪い」などの評価をする必要はありません。指導の初期段階では、顧問が“解説者”ではなく“読み手”として関わるのが有効です。

例：「この写真、何を撮ったの？」「この部分が気になったのはなぜ？」「撮ったときの気持ちは？」

こうした質問を通じて、生徒自身が作品意図を言葉にし、作品が深まっていきます。顧問は“聞き手としての力”を育てることが、結果的に評価力になります。

2. 評価のための基本視点（初心者顧問向け）

以下の3つの視点を押さえておくと、専門知識がなくても適切なコメントができます。

観点	見るポイント	コメント例
内容（何を撮ったか）	テーマ・伝えたい気持ち	「この写真、何を見せたいと思ったの？」
形式（どう撮ったか）	構図・光・タイミング	「この明るさや角度を選んだ理由は？」
意図（なぜ撮ったか）	撮影者としての視点	「この瞬間を選んだのは、どんな気持ちだった？」

この3視点を意識するだけで、作品講評の質が劇的に上がります。

3. 実践の工夫：生徒との対話型講評会

例：顧問のファシリテーション

- ・写真を壁やモニターに並べて展示。顧問は「説明役」ではなく「質問役」。
- 「どの写真が気になった？」「それはなぜ？」「この写真の“静けさ”を生み出している要素は何だろう？」
- ・生徒同士の意見を引き出し、顧問がそれを整理してまとめる。

これにより、顧問が専門家でなくとも「写真を見る場をつくる指導者」として機能できます。

4. 書籍を通して

写真関連の書籍を「教員自身の学びのための読書」と位置付け、月に1章ずつくらいのペースでゆっくり読み進め、部活動のメタ視点を養います。

- ・生徒の作品講評時に「この写真、もしかして〇〇時代の××の作品と似ているかな？」と比較できるようにする。
- ・生徒に対しても「これ、少し〇〇の写真と似ている／違うところは何だろう？」と問い合わせ、鑑賞眼を育てる。
- ・「作品とは何か」「撮るとはどういうことか」を自分なりに言語化して、生徒との共有ワークショップを実施。
- ・書籍から引用できる例（作家のコメント、写真家の意図、時代背景）を部活の資料としてプリント配布・共有する。

Q4 「写真を見る力」を養うのに役立つような本を挙げてください。

A 「写真の見方」を養ううえでお薦めできる書籍を、いくつかご紹介します。ご紹介する本は、技術的な撮影テクニックだけでなく、「どう見て・どう解釈するか」「作品としての写真とは何か」を考える助けになるものです。顧問教員・写真部生徒どちらにも活用できます。



『写真の読みかた』 名取 洋之助（岩波新書）

「写真を見るということは、写真を読むということでもある」という観点から書かれた日本のクラシックな写真論。見ることを“ただ眺める”から“言葉／解釈”に変える視点がしっかりしており、初心者の顧問教員にも向いています。

『ファインアート写真の見方』 福川 芳郎（玄光社）

写真を美術作品（ファインアート）として見る際の「評価される写真の基準と値段」などを論じた書。ギャラリー・作品としての写真を扱う視点が入っており、写真部で「作品として」見る・考える力を育てるにはとても良いです。

『名画から学ぶ 写真の見方・撮り方』 東京カメラ部、塚崎 秀雄（翔泳社）

絵画という視点を使って、構図・配色・視線など、写真にも応用できる“見る技法”を紹介。写真だけでなく絵画を媒介にして「なぜこの構図が効果的か」を考える方式で、視野を広げられます。

『写真論』 スザン・ソンタグ（晶文社）

写真をめぐる社会・文化・記憶・表象の問いを深く掘り下げる、写真を見る・語るための古典的著作。多少読むのに時間がかかりますが、「写真とは何か」を根源から問いたい顧問や上級部員には非常に価値があります。

『迷走写真館へようこそ』 大竹 昭子（赤々舎）

36名の写真家の作品一点一点に目を凝らし、「見ること」の可能性を探るエッセイ集。まさに「見る力」を育てるための訓練となる読み物で、生徒・顧問の両方にとって刺激になる一冊です。※この記事の筆者も本書を推薦します

『写真を紡ぐキーワード 123 — 写真史から学ぶ撮影表現』 大和田 良（インプレス）

写真史・表現用語を「123 キーワード」で整理。用語・コンセプト理解に役立つ。顧問が教える際の辞典代わりに。

いかがだったでしょうか？ 膨大な Web 上の情報をまとめたに過ぎないのでしょうが、AI もなかなかやるな、と感心しました。もちろん生成系 AI が output する内容は必ずしも正しいとは限りませんが（今回も「この世に存在しない書籍」を紹介してきました）、そういう間違いは人間の目で、可能な限り校正しました。

この記事が、写真部顧問の先生方、そして意欲のある写真部員の皆さんにとって、少しでも参考になれば幸いです。

2025 年 11 月作成

福岡県高等学校芸術・文化連盟 写真専門部

追記：この記事をまとめている最中、偶然立ち寄った書店で「とてつもない」本を見つけてしました。

『部活でスキルアップ！ 写真部 活躍のポイント』 吉田 允彦（メイツユニバーサルコンテンツ）

著者は現役でベテランの写真部顧問の先生で、生徒との関わりや部活動運営を通して得た知見がベースになっています。撮影・作品セレクト・心構えなど、写真を作るうえで大切なポイントが丁寧に解説されているだけでなく、コンテストや写真展に参加する際の準備や注意点、撮影会や講評会を部活の場としてどう活かすか、生徒同士・顧問との関係をどう育てて技術を伸ばすか、などが取り上げられています。また、全国の他の強豪写真部の活動例や取り組み事例も紹介されていて、とても参考になります。

パラパラめくった数秒後にレジに向かいました。こんな本が出ていたことに、どうして 1 年半も気付かなかったのでしょうか。うかつでした。この本に書かれていることを全て実践するのは不可能だと思いますが、どこか一つは必ず写真部の指導に役立つはずです。絶対におすすめです。